論 文

# ウェンデル・ベリーの「大経済」としての「神の国」について

今　村　正　夫

## はじめに

本稿[1]は，現代アメリカを代表するキリスト教環境思想家ウェンデル・ベリー[2]の「大経済（Great Economy）」としての「神の国（the Kingdom of God）」についての考察である。

日本におけるW. ベリー研究は，環境思想の中で成果が見られるものの，キリスト教思想においては十分とはいえない[3]。そこで本稿は，W. ベリーの小論「二つの経済（Two Economies）」[4]で論じられている「大経済」に注目する。W. ベリーは「神の国」を「大経済」と言い換えて，実際的な神の国を示している。この観点に立ちて本稿の目的は，この経済および宗教の視点から論じられた「大経済」の考察を通じて，彼が提示する神の国を解明することにある。そしてその解明を通じて，今日の支配的な工業的経済（industrial economy）[5]に取って替わるキリスト教的経済の可能性を示唆したい。

W. ベリーを簡単に紹介しておく[6]。日本では彼は環境思想家，農夫，小説家，詩人，文芸評論家，哲学者として紹介されている。彼の多くの著作の中でも生態環境についてのエッセイは，アメリカでもっとも敬意を払って読まれている。日本でも環境ジャーナリスト・翻訳家の枝廣淳

子が訳したW. ベリーの小論「怖れを前にして想う」は，2002年発刊の坂本龍一監修『非戦』（幻冬舎）に収められ，現代アメリカを代表するエコロジスト作家としてW. ベリーを有名にした[7]。

W. ベリーは農業の実践を通して神学をする。40年以上ケンタッキー州で農業を営むかたわら執筆活動を行い，これまでに40冊以上を発表した[8]。本稿で取り上げる小論「二つの経済」は1983年に執筆され，農業の実践とキリスト教の観点から今日の工業的経済を批判したものである。その小論は彼の小論集『家庭経済学』（*Home Economics,* Berkeley, CA: North Point Press, 1987）に収められている。

ここで指摘しておきたのは，キリスト教の思想を持つW. ベリーの説明が日本ではほとんど抜け落ちている点である[9]。彼の思想は農的生活主義（Agrarianism）の観点から取り上げられた[10]。しかしキリスト教の観点から彼の思想を考察したものがほとんど見当たらない。これに関してW. ベリー自身が述べているように，彼の思想の根幹は聖書とキリスト教の伝統に基づいたキリスト教の信仰である[11]。

「二つの経済」は今日の工業的経済批判に集中する。工業的経済は今日支配的であるがその弱点が指摘される。そこでW. ベリーは工業的経済を修正し，改良するために「神の国」を定義し，その導入を試みる。

W・ベリーによれば工業的経済の弱点は，工業的経済が包括的ではない点にある。なぜなら工業的経済では「自然の原理を定義できない」からである[12]。つまり工業的経済は自然と調和しない。そして自然の原理を定義できないために破壊を伴う。彼の小論「まるごとの馬—工業主義か農的生活主義か」はまさしく，工業的経済が包括的ではなく，自然と調和しないために自然を破壊し修復不能にすることが指摘された論文である[13]。そこでは利用できない物を「役に立たない（useless）」，「つまらない」，「でたらめの」あるいは「野生の（wild）」と形容し，「混沌」，「無秩序」あるいは「荒れ地（waste）」と名付け，そうするこ

とによって，それを台なしにするか，またはそれを最終的に利用する準備として安価な物にすると述べられる[14]。すなわち経済の非包括性の特徴は，深刻なあるいは無謀な破壊の産出といえよう。このような批判を与えた上で，W. ベリーは工業的経済に対抗する経済思想として，キリスト教の視点を取り入れた「神の国」を提示する。工業的経済を脱する包括的な経済は，宗教の言葉を必要とするためである。

## 1. 大経済としての神の国

### 「神の国」— 説明不可能性と実際性

包括的な経済とは何も除外しない経済である。それは宗教の言葉，言い換えれば説明不可能性を要求する。なぜなら自然をも包括する経済，すなわち「自然の原理を定義できる」経済を人間が説明することは不可能であるからだ。W. ベリーは英国の古典学者・翻訳家オーブリー・デ・セリンコートの言葉を引用し，「いつの時代でも宗教が関わってきたのは，知識が洞察できない広大な揺れ動く経験の領域で，人間は自分の理知によってうまく扱える事柄の狭い閉じられた円を超えて，その領域が拡がっているのを知っている，またはそう感じている」ことに同意する[15]。では宗教の言葉である「神の国」を，W. ベリーはどのように定義しているのだろう。

彼によれば「神の国の説明不可能性」を説明することを要点とする。「今後も私は聖書への言及を必要とする心境のままに留まるだろう。そういう心境に留まるということは，ひとつの論点である。」なぜなら，「宗教的伝統を介在させずにそれを定義することはできないからである。」神の国は，「既知であるとともに未知であり，可視的であるとともに不可視的であり，理解可能であるとともに不可解である。それは経験と，経験から生じる実際的な問いの究極的状態であり，またそれは，そ

れらの問いの考察に最高度の真剣さと最高度の謙虚さを必須の条件とする」[16]。つまり神の国の全体像を説明しようとするとき，人間の知識と理解の限界を部分的に認めることがその要件となる。

W. ベリーは神の国がひとつの経済だと主張する[17]。またいくつかの点で実際的な経済であるという。神の国は，「さまざまな価値，または力，または必要不可欠なものが分配され交換される原理やパターンを含んでいる。」しかし，「人間が直接的に参加できる経済ではない。」人間は部分的にしか理解できない力や法則に服従し，大きな不安とともに生きることしかできない[18]。したがって神の国は人間のコントロールを退け，実際的な服従を要求する。その服従こそがその経済の実際的な側面であるといえよう。

### 大経済と小経済

W. ベリーは神の国が実際的な経済であることから，神の国を「大経済」と呼ぶ。包括的な経済であるために大経済に外部はない[19]。「専門分化または概括化のいずれかへ逃避することもありえないし，「休憩」もない。どんなに取るに足らないことであろうと対象外に外されることはない。大経済の構成員総体（membership）においてはあらゆることが有意義だからである」[20]。したがって大経済の内部にあるすべてのものには意味がある。では大経済と人間の経済との関係はどうか。

W. ベリーは人間の経済を「小経済」と呼ぶ。小経済は大経済の下位に置かれ，大経済の内部にある「人間の理知によって扱いえる狭い円」を形成する[21]。なるほど「2つの経済」とはこの意味においてである。次に，その両者の関係に入る前に，W. ベリーの大経済としての神の国における五つの原則を明示しておきたい[22]。

## 神の国の五原則

神の国の第一原則は，すべてを含むということである。「神の国においては一羽の雀が落ちることさえ意味のある出来事なのだと，過大な推測を交えずに言うことができる。」言い換えれば何も除外しないということであろう。そして，人間は「それを知っているか否かにかかわらず，またそれを望むか否かにかかわらず」，すべてのものとその出来事のなかに存在することを意味する。

第二の原則は，すべてのものが繋がっているということである。これは生態学的な原則である。生態系は秩序を本質とする。すなわち「神の国は秩序だっている，というエコロジー的かつ伝統的な原則である。」

第三の原則は，その秩序に対して人間が既知であり，可視的であり，理解可能でもあるが未知であり，不可視的であり，不可解であると認めることである。それは「人間は神の国のなかに含まれる生き物すべてを，また含まれる生態系のパターンをあるいはその秩序法則のすべてを，必ず知らないし，決して知ることもできないという」原則である。

第四の原則は，神の国の中にある秩序を侵犯すれば，「厳しいペナルティー」が用意されていることである。神の国の秩序は人間が知りえるより大きく，かつ知りえる以上に複雑である。したがってその秩序の完全で適切な説明は人間には不可能である。そしてそれは人間の制約を認めることである。もし人間がそれを認めず人間の制約を乗り越えようとするとき，不可避的な罰を受ける。

この第四の原則に対して，W. ベリーは聖書から二つの話題を取り上げる。一つは，旧約聖書の「自分の手」の力に対する過信を諌める逸話である。士師記の7章前半で述べられている，主とギデオン並びに彼が率いる民との関係にまつわる箇所を取り上げ，「メディアン人に立ち向かうギデオンの軍勢は，三万二千人から三百人に減らされてしまった。これは明らかにイスラエル人達に『自分の手で救いを勝ちとった』と言

わせないためであった」とW. ベリーは説明する。

もう一つは，安息日の目的である。「働かない」，つまり「止める」ことは，休息のみならず人間の働きの限度や抑制を示す。人間は何らかに依存している存在である。ときに過大に依存する。人間の活動に制約を与えたのが安息日である。

そして最後の第五原則は，大経済の目指すところを予見できないということである。なぜなら大経済の中で構成している物が，ある形から別な形へと常に変移しているからである。ある場所で失われる物，あるいは浪費される物は，いつもどこか別な場所に現れる。では神の国の中で起きていることの価値を説明できるのは何か。それは人間にとってではなく，神の国にとって「良い人間経済（a good human economy）」を形成するときのみである[23]。

### 良い経済 ― 神の国／大経済と人間経済／小経済との関係

人間経済，つまり小経済が神の国，つまり大経済と調和し，呼応し，類似するとき，それは良い経済を形成する[24]。これは人間の認識において常に良いとはならない。なぜなら神の国と同じように，その目指すところを予見できないからである。したがって人間経済が神の国の五原則を認識し，それらを導入するとき良い人間経済を形成する。

神の国と人間経済との相違も認めなければならない。W. ベリーによるとそれはガチョウと，それが産んだ金の卵との違いに等しいという[25]。人間経済は金の卵に価値を付け加え，それを評価することはできるがその卵自体を産み出すことはできない。一方，神の国は卵，あるいは卵の価値を産み出すが，人間に価値を付け加えられることはない。

もし人間経済が価値を生み出すと主張するとき，その価値は抽象的で，偽りで，専制的で，破壊的である。たとえば金銭の価値は，人間にとって究極的に必要な衣服，食物，住居を正しく安定的に表すときのみ

本物であるといえる。しかしその価値を曲げるとき，その価値は自然および人間の源泉にダメージを与える[26]。

したがって人間経済は，神の国で生みだされた一次的価値を継続的に入手可能にする仕方で運営しなければならない。また一次的価値を喜んで受け取り，それらを減少させることがないように利用する義務がある[27]。なぜなら良い仕事は正しく評価され，良い仕事をする者は正しく報われるからである[28]。良い仕事とは，神の国との関係において人間経済がその立場に応じてしなければならないこと，また，してはならないことである。その認識から導き出される人間の限度と抑制は，人間にとってある種，利益（a human good）となる[29]。こうした認識を踏まえて，次に一次的価値に最も密接に関係している表土を検討したい。

## 2. 表　土

### 一次的価値としての表土

W. ベリーは農業の実践を通じて表土の定義を試みている。表土とは人間が作ることができないもの，また何かで代用することができないものである。表土のプロセス自体のために人間が貢献できることは何もない。人間は表土に対してそのプロセスへの賛同，保存協力において可能である[30]。なぜなら表土の持つ能力は人間と，その将来に恩恵を与えるからである。このような表土の捉え方は，大経済から小経済の中に生み出される一次的価値の代表例である。

表土を説明するとき，宗教の言葉を回避することは難しい[31]。なぜなら，表土についての適切な記述をすることは明らかに不可能であるためだ。「というのは，どんな土のサンプルでも不活性な物質量に還元できるけれども，現実の一握りの土はそのなかに生命を含んでいる」からであるとW. ベリーは論じる。そして「そこには生き物がいっぱいい

る。もしその生命の振る舞いを記述しようと目を向けたならば，うっかり『地上のものでない』（unearthly）と呼んでしまいそうなことを生命が行っているのに気づくだろう。それは死から生を作っているのである。」さらに，「表土の機能は，機械論者にとっては単に機械的に見えるかもしれないが，実は複雑で驚異的な振る舞いをしている」と述べる[32]。表土を説明するとき，機械性が遠ざけられ神秘性が近づけられる。

また表土は量であり，定義上は良い土であるという。その恩恵は計り知れないからだ。しかしそれを人間のために利用するとき，良い仕事を通じて質を必要とする。もし人間が表土を単に量と見なし，尺度で測定し始めるとき，言い換えれば本来の価値を曲げるとき，そのなかの生命，収穫能力，保水・排水などの能力，洪水調整，恒常的水供給，侵食調整の役割を破壊する[33]。このような表土に向き合うとき，畏敬の念を抱かざるをえない。

### 農業の視点からの神の国

農業は表土に依存している。農業とその従事者が表土依存を認識するとき，それぞれ「良い」と呼ばれはじめる。良い表土とは，排水と保水の両方の働きと多様性を特徴とする。人間はその価値を喜んで受け取り，それらを減少させることがないように農業のために保全の仕方で取り組まなければならない。なぜならその仕事は正しく評価され，正しく報われるからである。つまり，「表土は絶えず死を生に変化させ，表土のなかで，表土に基づいて生きるすべてのものに絶えず食物と水を供給し続けているからである」[34]。

このような見解をもってW. ベリーは，神の国の認識と共に良い農業と良い農業従事者と呼ばれるために二つのことを提示する[35]。一つは，何をすべきかを知ることである。土はその価値から，それを改良し肥沃にしなければならない。その中心たるものが保水と排水の両方と，生物

と無生物が構成する生態系と呼ばれる近隣共同体（neighborhood）の促進である。もう一つは，何をすべきでないか，またいつ止めるべきかを知ることである。土は決して人間によって操られる機械的な装置ではなく，人間が何もしないことによって改良される。W. ベリーはここに，安息日が設けられている実際的な意義があると主張する。

さらにW. ベリーは，人間の生命と暮らしが表土の贈り物によって成り立っていると主張する。人間の生命と暮らしは表土の贈り物であり，また表土の世話をし，良い麦を育て，良いパンを作るための快諾と能力の贈り物である[36]。農業の視点から言えば表土は，人間の生命と暮らし，またその世話をするための贈り物である。したがって神の国とは，人間に必要なものを与える贈り主と言える。しかしその贈り物を人間の手で曲げると，人間に必要なものを台なしにするか，安価なものにしてしまう。そこで次にW. ベリーのいう小経済としての人間経済を明らかにした上で，その贈り物を台なしにしている工業的経済の問題点の検討に入りたい。

## 3. 小経済としての人間経済

### 良い経済としての小経済

小経済とは大経済の中で狭い円を形成し，下位に置かれ人間の理知によって扱うことのできる経済である。それは人間経済とも呼ばれる。その認識において「良い」と呼ばれる。また人間経済が良い経済であるためには，大経済の中に調和するように収まり，大経済に呼応し，いくつかの点で類似しなければならない[37]。したがって人間経済は，大経済に依存しているために良い経済でなければならない。なぜなら良い経済は人間に必要な物資を定義し，評価し，大経済と同じようにその物資を保全し，持続を呼びかけるからである。換言すれば大経済のさまざまな

恩恵を，卓越した恩恵であると感知し，その恩恵のためにそれらを正しく評価し，保全し，持続させてこそその経済が良いといえるからである[38]。

今日の工業的経済は小経済である。しかし良い経済とは呼べない。なぜならそれ自身を小経済と認識していないからである。むしろ唯一の経済と思い込んでいるからだとW. ベリーは批判する[39]。つまり問題は人間経済が「二つの経済」を認識していないことにある。

### 工業的経済の問題点

工業的経済は，それ自身が機械的に何か別の物に変形するのに適した「原料」とみなし利用できる物のみを尊重する[40]。それは単純化を好み，複雑さ，不可解さを嫌う。W. ベリーは工業的経済を農業に押し付けるとき，その問題点が明らかになるという。なぜなら農業の工業化は，複雑で不可解な自然の原理を定義できないからである[41]。良い農業は表土の恩恵を認め，改良し，良い表土を促進する。良い表土は排水と保水の両方収容力を増加させ，つながりを表す多様性をもつ。しかし工業的農業はそれらを対立機能とみなし相容れない。面積拡大，単純化という機械的解決策に依存し，ダムや土手などの保水装置の依存による重荷を背負い込む[42]。しかもその「結果に対する無責任」を露呈する[43]。W. ベリーはその無責任の代表例に，コントロールと競争の問題を取り上げている。

工業的経済のお気に入りの言葉が「コントロール（管理・制御）」であり，工業的経済にある人間は一方で自然を含むさまざまな事態のコントロールを好み，他方で人間性（人間に本来そなわった自然）に制限を加えることを拒む[44]。W. ベリーはこの両者が暴力的な爆発の発想をもたらすと主張する。その代表例が核の大虐殺である。一方でコントロールを好み，他方で制限されることを拒み，その結果コントロール不能に

よる爆発をもたらす。今日の世界を不況にいたらせたサブプライム問題もこれと同列であると思われる。工業的経済は大経済の贈り物を「原材料」,「自然資源」, ましてや「電子マネー」と呼び, コントロール下に置く仕事に取り掛かる。そしてその仕事の結果に対しては無責任であるといえないか。

さらに大経済との調和を拒むのが競争であると, W. ベリーは断言する。競争はそれ自体を美徳ではないが「美徳」として, また支配原理として設定される。しかし支配原理および美徳とされた競争は, コントロールが究めて困難な, おそらく矛盾する論理を押し付ける(45)。たとえば武器があげられる。防衛としての武器所持が実は自殺的でもあるという論理は明らかに矛盾している。しかしその競争が支配原理となり, 美徳として実際上正当化されてしまう。そしてその結果に対してはやはり無責任であるといえないか。

W. ベリーは, 経済的理想がコントロールと競争の論理に満ちた結果,「最小限の責任で最大限の利益または権力を得ること」に陥り, 矛盾する論理を押し付けていると論じる(46)。たとえば自由市場原理を拡げ, 規制緩和を要求する多国籍企業と犯罪との間に境界線を引くことの困難さである。では小経済としての人間経済の理想は何か。W. ベリーは,「最小限の消費で最大限の幸福を得ること」であると述べる。これは隣人愛を説明しかつ必要とするという(47)。

## 4. キリスト教的経済の可能性

### 大経済と小経済との関係 — マタイによる福音書6章より

W. ベリーは大経済の実際的かつ精神的な教えとして, マタイによる福音書6章25～34節の箇所を取り上げる。この箇所は人間が「複雑に相互に組み合わされた部分からなる構成員総体で, 相互に恩恵を受け合

い，お互いからと全体から意義と価値を受け取る構成員」として大経済の中に含まれることを示している。「野の花がどのように育つのか，注意して見」なければならないのは，その「野の花」が「称賛に価する」（exemplary）からではなく，「仲間」（fellow members）だからである。また重大な点で人間と類似しているからである[48]。

大経済の中の小経済は大経済と調和しなければならない。すなわち良い経済となるためには「構成員総体を近隣共同体と見，自分自身をそのなかの一隣人（neighbor）と見ることである」[49]。一羽の雀が落ちることさえ，あるいは忘れられずに意味のある出来事だという[50]。

小経済は優先事項を持つ。このマタイの一節は何よりもまず神の国を求めなさいと述べる。これは「思い悩むな」と言ってこの世のいかなる経済の価値を否定し，神の国だけを求めることを意味するものではない。この箇所は加えて，小経済としての人間経済が「大経済を明らかに必須の優先事項とし，その内部に作られるいかなる小経済より上位に置」くことを要求している。したがって人間経済は大経済の中の小経済，つまり二つの経済を先ず認めなければならない。

人間経済は大経済から脱出できない。そうであれば大経済が宗教の言葉を必要とするように，大経済の内部の神聖さを認めなければならない。W. ベリーは米国の詩人ホイットマンの詩「堆肥」を引用し，キリスト教の伝統の中で述べられた「小麦の甦りは，その墓場から青白い顔で現れる」，また大地について，「それは神々しい物質を人間に与える」という適正な言葉の使用に同意する[51]。

神聖さの中では，人間に経済的制限が暗示されていることは明らかである。確かに野の花や空の鳥と違って，人間は大経済の中の小経済を否定することを選ぶことはできる。しかしその選択の場合，未来を減少させてしまう。たとえば化石燃料や地下水などを使い果たすとき，未来に対して返済できない負債を背負い込むからである[52]。

このような議論を得て，ここに大経済としての神の国における，一つのキリスト教的経済（a Christian economy）の可能性が示唆されることになろう。

## キリスト教的経済の可能性

W. ベリーは，マタイによる福音書6章からキリスト教的経済の可能性を示唆する。彼の説明に従えばその根拠は二つある。一つは，人間の状況が聖書の著者たちの時代と同じで何も変わっていないという点である。人間は神々のような力を盗用したり利用できる。しかし結果をコントロールできない。たとえば有毒なあるいは放射性廃棄物を人間は処理できない。人間は聖書の時代と同じように，人間は表土がすることをできない[(53)]。

もう一つは，実際的な意味をもつものとして美徳を必要とする点である。W. ベリーは大経済の中の近隣共同体において美徳，特にキリスト教の伝統の七つの美徳，すなわち分別（prudence），正義（justice），節制（temperance），堅忍（fortitude），信仰（faith），希望（hope），慈悲（charity）のすべてが有意義であると確信する[(54)]。ただしその美徳はそれ自体が行為とならず，人間が日々の生活において取り掛からなければならない仕事として，総じて良い人間経済と呼ばれるようなものとして表れる。W. ベリーは，「美徳が大経済のなかで正しく実践されるとき，それらは美徳とは呼ばない。それらは科学と技術をもって良い農業，良い林業，良い大工仕事，良い酪農経営，良い織物仕事と針仕事，良い家政，良い親，良い近隣共同体などと呼ばれる」と主張する[(55)]。

そしてW. ベリーは小経済の理想と同じように，その目的が「最小の消費で最大の幸福を得ること（to obtain the maximum of well-being with the minimum of consumption）」であると述べる[(56)]。これは経済

学者・仏教思想の実践家エルンスト F. シューマッハーが論じた仏教経済学の目的でもある[57]。これがマタイによる福音書6章25～34節が意味するものと同じだという[58]。すなわち「何を食べようか，何を飲もうか，何を着ようかと思い悩むな」は最小の消費を想定し，「まず，神の国を求めよ，そうすれば，これらのものはみな加えて与えられる」は最大の幸福を得るということを意味する。

### キリスト教経済の問題点 — 多元論において

このような聖書およびキリスト教的観点と経済を結び付ける作業においては，すべての人間がキリスト教の伝統を持っていないという問題があげられよう。すなわち多元論の課題である。もしキリスト教の伝統を持っていたとしても，聖書解釈およびキリスト教的観点が一枚岩ではない問題に直面する。要するに文化もしくは宗教の多元論において，すべての人間に説得力をもって大経済としての神の国をどのように説明するのかという問題である。

W. ベリーは聖書とキリスト教の伝統をもとにして，キリスト教的経済の可能性を示唆するが，そう呼ぶあるいは聖書を使用することを避けようと試みている。何よりも神の国を大経済と言い換えた[59]。また道教のすべての創造物の総体であるタオ，老子の美徳，E. F. シューマッハーの仏教経済学の目的に賛同している[60]。

E. F. シューマッハーは仏教を選び，その経済学を主張したのが他意あってのことではなく，ユダヤ教，キリスト教，イスラム，東洋の伝統的英知などいずれの教えでもよいと述べている[61]。ただ宗教を持ち出すのは人間経済が正しい経済，言い換えれば良い人間経済となるために人間経済に宗教の言葉を必要としたからだというのがシューマッハーの立場である[62]。W. ベリーはこの主張に賛同する。

## おわりに

大経済としての神の国は，人間経済が良い経済であるときに見出す。そうでなければ見出すことは難しい。良い経済とは，たとえば「人間の経済を支える自然の基礎―土壌，水，大気― を保全する努力を見直し，新たに広げていかなくてはならない。まだ残っている手つかずの生態系と水系を保護し，すでに痛めつけられた場所については修復をはじめる」ことである(63)。

大経済としての神の国を主張するとき，神の国を求める「主の祈り」があげられよう。「主の祈り」の「御国が来ますように」は，人間が支配する経済ではなく，神が支配する経済，言い換えると唯一人間が支配しない経済が実現するようにとの祈りであると解釈できないか。また，「日毎のパンを与えたまえ」は有り余るほどのパンではなく，W. ベリーのいう「最小限の消費で最大限の幸福を得る」祈りであるといえないか。

W. ベリーは，「聖書のどこにも『自然環境』を『使い尽くす』のを許すようなことなど書かれていなし，そのことを暗示する言葉もない。反対に，聖書はすべての生き物と神の間には完全に親密な関係がある」と述べる(64)。また創世記の「生き物を支配しろ」との聖書の記述も，「現代の自然破壊を聖書のせいだと言って非難する人々は，聖書が生き物の多様性や個性に喜びを見出し，生き物が神聖であると主張してきたことを見落としている」と論じる(65)。すなわち人間が支配されたものとしての認識が見落とされているのである。

こうした考察により，「大経済」としての「神の国」について我々に与えられた課題と共に結論付けたい。先ず，唯一無二とする利益優先の工業的経済支配の中で，我々がW. ベリーのいう二つの経済を認識しなければならない。次に神の国が人間経済を囲む実際的な包括的な秩序で

あり，さらにその秩序に調和するために，「最小限の消費で最大限の幸福を得る」仕事に取り掛からなければならない。この認識と実践が神の国であるし，もしくはそれを近づけることに他ならないといえよう。それ故にもし我々がキリスト教的経済というときその経済では，その神の国の追求こそが今日の工業的経済による利益追求に替わる要件であるといえよう。

**注**

（1）本稿は，日本基督教学会第57回学術大会（2009年8月29日，於北海学園大学）での筆者による研究発表「ウェンデル・ベリーの『大経済』としての『神の国』について」の原稿に筆者が加筆修正したものである。

（2）アメリカの環境史及び環境思想史の第一人者として世界的に評価を受けているカリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授のロデリックF. ナッシュ氏は，ウェンデル・ベリー（Wendell Berry, 1934-）をアメリカの環境思想家の系譜に登場させている。R. F. ナッシュ著『アメリカの環境主義　環境思想の歴史的アンソロジー』松野弘監訳，同友館，2004年，374頁（Nash, Roderic Frazier. 1989. American Environmentalism: Readings In Conservation History, Third edition, McGraw-Hill, Inc.）を参照。ちなみにベリーは，アメリカ・カトリックの司祭及び文化史研究者並びに環境神学者トーマス・ベリー（Thomas Berry, 1914-2009）とは別人である。したがって，トーマス・ベリーとの混同を避けるために，W. ベリーと表記する。トーマス・ベリーについては，藤井清久著『歴史における近代科学とキリスト教』（教文館，2008年，221頁）で紹介されている。

（3）W. ベリーを環境思想家として日本に広く紹介したのは，名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授の加藤貞通氏であろう。加藤氏は，ノーマン・ウィアツバ編『ウェンデル・ベリーの環境思想—農的生活のすすめ』（昭和堂，2008年，原典：Wendell Berry, *The Art of the Commonplace : The Agrarian Essays of Wendell Berry,* ed., Norman Wirzba, Berkeley: Counterpoint, 2002）を訳した（但し抄訳）。加藤氏が「落ち

着きを失いゆく時代に—訳者あとがきにかえて」でW. ベリーを解説しているように，W. ベリーを南部農本主義者（Southern Agrarians）の流れを汲むニュー・アグラリアニズム（New Agrarianism）の中核的な存在として注目している。南部農本主義者とニュー・アグラリアニズムについて，また，W. ベリーの詳しい紹介及びその他三冊の邦訳については，加藤氏の訳者あとがきの247－255頁を参照。

（4）W. ベリーの「二つの経済」は，『ウェンデル・ベリーの環境思想』に所収されている。

（5）Industrial Economyは，一般に「産業経済」,「工業経済」と訳されているが，ここでは加藤氏訳の「工業的経済」に準ずる。

（6）W. ベリーの紹介については，拙著「大地の管理責任—ウェンデル・ベリーの思想より」（明治学院大学キリスト教研究所「紀要第44号」，2011年12月），87－88頁も参照。

（7）W. ベリー「怖れを前にして想う」（枝廣淳子訳，『非戦』（坂本龍一監修，幻冬舎，2002年），307－316頁を参照。出典は，“Orion”および“Orion Afield”誌のウェブサイトの Wendell Berry, ‘Thoughts in the Presence of Fear,’ Orion Online. org, 2001, On-line at http://www.oriononline.org/pages/oo/sidebars/America/Berry.html。

（8）加藤貞道「落ち着きを失いゆく時代に—訳者あとがきにかえて」，254頁。

（9）W. ベリーは，’The Christian Century’ 誌（1997年）とのインタビューで，南部バプテスト教会に属していたが，現在は教派にこだわっていないと答えている。しかし，聖書とキリスト教の伝統を重んじている。Morris Allen Grubbs, ed., *Conversations with Wendell Berry,* University Press of Mississippi, 2007, p.118を参照。W. ベリー著書の邦訳『ウェンデル・ベリーの環境思想』,「怖れを前にして想う」,『言葉と立場』（谷恵理子訳，マルジュ社，1995年，原典：*Standing by Words,* North Point Press: San Francisco, 1983），（『ライフ・イズ・ミラクル—現代の迷信への批判的考察』（三国千秋訳，法政大学出版局，2005年，原典：*Life Is a Miracle : An Essay Against Modern Superstition,* Counterpoint, 2000）のそれぞれの「あとがき」を参照。

（10）たとえば，加藤貞道氏は，W. ベリーの近代農業批判の観点における環

境思想を取り上げる。一方，たとえば，米国の最もすぐれた環境思想史研究者であるロデリックF. ナッシュ氏は，宗教の項目でW. ベリーを取り上げ，彼のキリスト教の観点における環境思想を論じている。ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利—環境倫理の文明史』（松野弘訳，ちくま学芸文庫，1999年）の第4章「宗教の緑化」，270頁を参照。

（11）Wendell Berry, *The Way of Ignorance and Other Essays,* Berkeley, CA: Counterpoint, 2005, p.127.

（12）『ウェンデル・ベリーの環境思想』，187頁。

（13）同上，30頁。

（14）同上，186頁。

（15）同上，176頁。Aubrey de Sélincourt, *The World of Herodotus,* San Francisco: North Point Press, 1982, p.171.

（16）『ウェンデル・ベリーの環境思想』，175頁。

（17）同上。

（18）同上。

（19）同上，201頁。

（20）同上。

（21）同上，176頁。

（22）神の国の五原則については，同上および172－179頁を参照。

（23）同上，180頁。

（24）同上，179頁。

（25）金の卵を産んだガチョウと金の卵の議論は，同上，180－181頁を参照。

（26）同上，182頁。

（27）同上。

（28）同上，181頁。

（29）同上，180頁。

（30）同上，182－183頁。

（31）同上，183頁。

（32）同上，183－184頁。

（33）同上，184頁。

（34）同上，190頁。

（35）この議論については，同上，184－188頁を参照。

(36) 同上，190頁。
(37) 同上，179頁。
(38) 同上，180頁。
(39) 同上，186頁。
(40) 同上。
(41) 同上，187頁。
(42) 同上。
(43)『ライフ・イズ・ミラクル』，103頁。
(44)『ウェンデル・ベリーの環境思想』，190－192頁。
(45) 同上，197頁。
(46) 同上，197－198頁。
(47) 同上，198頁。
(48) 聖書からの引用は，すべて日本聖書協会発行『聖書　新共同訳』による。『ウェンデル・ベリーの環境思想』，198頁。
(49)『ウェンデル・ベリーの環境思想』，198頁。
(50) マタイによる福音書10章29節とルカによる福音書12章6節を参照。
(51)『ウェンデル・ベリーの環境思想』，183頁。
(52) 同上，176－177頁。
(53) 同上，189頁。
(54) 同上，198頁。
(55) 同上，200－201頁。
(56) 同上，178－179頁。
(57) 同上，179頁。エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハー『スモール　イズ　ビューティフル—人間中心の経済学』（小島慶三，酒井懋訳，講談社学術文庫，1986年，原典：Ernst Friedrich Schumacher, *Small Is Beautiful; A Study of Economics as if People Mattered, Muller,* Blond & White Ltd, 1973），74頁を参照。
(58)『ウェンデル・ベリーの環境思想』，179頁。
(59) 同上。
(60) 同上，174－175頁，179頁，200頁のそれぞれを参照。
(61)『スモール　イズ　ビューティフル』，67－68頁。
(62) 同上，80頁。

(63)「怖れを前にして想う」，314頁。
(64)『ライフ・イズ・ミラクル』，131頁。
(65) 同上，132頁。